記念講演

「自由の逆説」

中部大学学術顧問　加藤 秀俊

第９回嗜好品文化フォーラム「嗜好品 ―微妙な差異を愉しむ―」
浜離宮朝日ホール・小ホール
平成 23 年 5 月 21 日

限界的差異

嗜好品というものは、微妙な差異をたのしむものだということを議論するときいて、私がおもいだしたのは、50 年以上まえ 1950 年代に私がハーバードで勉強していたときに友人たちと議論しあった「限界的差異（marginal difference）」という概念である。あってもなくてもいいような微妙な違いということである。なぜそういうことが議論になったかというと、当時アメリカは第二次世界大戦が終わって、いちはやく大衆消費社会に突入していて、それまでおおむね黒ときまっていた自動車に、いろいろな色が登場してきた。二色にぬりわけたツートーン・カラーなどというものも流行した。自動車だけではない、あらゆる商品に微妙な差異化がはじまった時代である。

それに関連して、ここ数年のあいだに私がよんだなかで、たいへんおもしろかったのは、クリス・アンダソン（Chris Anderson）というひとの、「ザ・ロングテイル（The Long Tail）2004」という本である。長い尻尾という意味である。日本語訳もでた（「ロングテール」早川書房 2006）ので、たくさんの人がおよみになったとおもうが、その理論はひとことでいうと、昔はヒット商品はかぎられていて、それ以外は売れなかったのだが、インターネット販売の時代になって、それ以外の小さなロットのものも、すこしずつ売れて、それをグラフにすると、L字型のカーブが右のほうに恐竜の尻尾のように、なだらかにだらだらだらだらつづく、しかもそのマーケットが馬鹿にならない規模になるという話である。最近私は書店にゆくのがおっくうになって、本をインターネットで買うことがおおくなったのだが、おどろくのはどんな本でも、手にいれることができるということである。少ししか売れなくて出版社がさっさと絶版にしてしまった本でも、古書というかたちで、おびただしい種類の本が世の中に流通している。本にかぎらず、音楽の市場もそうであるし、化粧品から食料品、あらゆる商品分野が今日ではそうなっている。

嗜好品のひとつであるお酒も同様で、昔は全国ブランドの清酒は上方（かみがた）の池田、灘のものに限られており、地酒などというものは、輸送が大変な（嵩高品：カサダカヒンとよばれた）ので、その地域でしかのめなかった。ところが今では日本中の好きな地酒をおくってもらって味わうことができる。それが嗜好品の微妙な差異をたのしむ行動に拍車をかけているわけであるが、これはインターネット販売の普及以前にはかんがえられなかった現象である。

このように社会現象をグラフにあらわすことは、よくおこなわれることで、たいていのことは、平均値のところでもりあがる正規分布つまりベル型曲線になるのだが、こういう尻尾のような曲線をえがく現象もあることは、昔からわかっていた。それは私達が日常つかう語彙とその使用頻度の関係である。よくつかう語彙はわずかで、ほとんどそれで事たりているというのである。そのことを発見し

たのは、ズィップ（George Kingsley Zipf）というひとで、1949 年出版のその本には「人間行動と最小努力の法則（Human Behavior and the principle of least effort）」という、人を馬鹿にしたような標題がついている。辞書に載っている言葉は６万語ぐらいだが、日常語は２千くらい。取り扱い説明書などを、少ない言葉でわかりやすく書く試みもなされ、キャタピラー社は世界中で理解してもらえるようブルドーザーのマニュアルをわずか 800 語で書いた。私自身もこれまで、なるべく誰でもわかる、かぎられた言葉で表現しようと、つとめてきたつもりである。しかし、今後もそれができるのであろうか、という不安が私にはある。

自由ということの不自由さ

これだけ選択の自由が拡大された時代の私たちは、本当に幸福なのだろうか。あるものを選択するということは、他のものを捨象するということを意味する。ホテルの朝食の日本でバイキングという、英語ではブフェスタイルという方式がある。いろんなご馳走が何十種類もならんでいると、最初みた時はうれしいけれど、何をどのくらい、全部でどのくらいお皿に取ればいいのか目移りし、当惑する。取ったあとからも自分の選択がただしかったのか不安になる。自動車の広告は、それを買ったひとを、あなたの選択は正しかったのだと安心させるためにある、というマジソン街に伝わる有名な話があるが、あらゆる生活場面、商品選択でそれをやっていると、迷いと不安で、頭がおかしくなる。

つまり自由というものは、うれしいけれど、あまりに自由だと、不安になる、にげだしたくなる、誰か権威のあるえらいひとに決定してもらいたくなる、つよい力でしばってもらいたくなる。学校の制服などというものは、そういう必要から採用されている。戦時中、愛国婦人会というものがあった。その制服は割烹着だった。なかにどんなに上等のあるいはどんなに粗末な着物をきていても、上に割烹着さえきれば、みんな同じで、とやかくいわれず安心できたのである。ここまでいえば、社会心理学の講義で聞いた、エーリッヒ・フロム（Erich Fromm）という人がかいた「自由からの逃走（Escape from Freedom）」という 1941 年の本のことをおもいだすだろう。フロムは、ドイツの人々が自由を謳歌したワイマール共和国時代から全体主義の台頭を歓迎するにいたった原因が、そういう社会心理にあるということをときあかしたのだった。同じ時代に、不安におちいった人々を治療するために、フロイドの精神分析の理論がうまれ、私が「限界的差異」についての議論に加わっていた頃に急速にさかんになったのが、新フロイド学派による精神分析医の開業である。そして現代においては、犯罪や事故や災害など、何かがおきるたびに、かならずＰＴＳＤ（Post Traumatic Stress Disorder 心的外傷後ストレス障害）というものが問題になる。それほど現代の我々の心はこわれやすくなったということである。自由の増加というのは、そういうものとセットで考える必要がある。

知識の共有と交流の可能性

こういう時代の私たちのコミュニケーションというものは、はたしてちゃんと成立するのであろうか、はなしあって共通項をみつけだしたり、知識を統合したり、普遍的価値に一緒に到達したりできるのであろうかという疑問が、最近の私にはある。

急拡大した知識に何とかまとまりをつけ、共有しようとした最初が、18 世紀フランスの百科全書派の人たちだっただろうと思うが、その百科全書の掲載項目数は、数え方によってちがうが、およそ 7 万といわれている。現代世界の百科事典の代名詞とも言える「エンサイクロペディア・ブリタニカ」には、約 20 万項目が掲載されているが、インターネット上の「ウィキペディア」には、その 25 倍の

500 万項目が掲載され、さらに増加しつづけているという。紙の本の時代には全く想像もできなかったことである。

簡単な操作で誰でもたやすく、正確かどうかは別として、とりあえずの知識が手に入る時代になったことは、結構なことだとおもう反面、世の中にただよっている知識の幅はこれほど膨大で、それぞれ個人はその一部ずつしかもっていない時代、我々一人一人が、ロングテイルの右のほうに別々にならんでいる時代、個々人の経験がちがい、関心がちがい、おなじ言葉をつかっていても解釈がちがうという時代に、コミュニケーション、会話や討論、意見の合意というようなことが、はたして成立するのであろうか、成立するというのはどういう場合なのであろうかというのが、目下の私の問題関心である。

嗜好品の微妙な差異をたのしむことは結構だとおもうし、そのことを論じあうのもまた結構だが、それを共有できるのはどの範囲か、それをおおくの人たちと共有したければどうしたらいいかというようなことも、かんがえてみてほしいのである。

加藤 秀俊／かとう ひでとし●1930 年東京生まれ。社会学博士。一橋大卒業後、京大人文科学研究所助手、同教育学部助教授、学習院大学教授、放送大学教授、国立放送教育開発センター所長、国際交流基金日本語国際センター所長、日本育英会会長などを歴任。著書は、『見世物からテレビへ』『独学のすすめ』『隠居学』『続・隠居学』『メディアの発生　聖と俗をむすぶもの』『常識人の作法』など多数。